

千町無田（大分県九重町）の黒ボク土水田開拓史に思う

(独) 農業環境技術研究所

土壤環境研究領域長 小 野 信 一

日本土壤肥料学会では、2006年の総会で、「生活・文化土壌学」を第9部門として新設することを決定した。部門長は、北里大学教授の陽捷行さんである。2006年の秋田大会では、さっそく多くの興味ある発表があった。筆者も発表の末席を汚したが、その内容について本誌より原稿の依頼を戴いたので、この拙文を作ってみた。

なお、千町無田調査に際しては、筆者の旧九州農業試験場時代の室長古賀汎さんのご協力を戴いた。記して謝意を表します。

1. 豊後風土記と朝日長者伝説

奈良時代に元明天皇の詔みことりによって、諸国で「風土記」が編纂された。このうち、現存しているものは常陸、出雲、播磨、肥前、豊後の五編のみである。「豊後風土記」は不完全ではあるが現存しており、その中に“餅的ぶんごふどきと白鳥の話”が記述されている。原文は漢文体の古和文で書かれているが¹⁾、後世の人がこの記述をやや意識して“朝日長者伝説”として伝えている。筆者は大分県の生まれなので、子どもの頃からこの昔ばなしは、絵本や紙芝居で知らされてきた²⁾。また最近では、地元でミュージカルなどに脚色して上演されているとも聞く。この昔ばなしの概要は次のとおりである。

《その昔、九重高原の中心部に、浅井長治という長者が住んでいた。この人は別名“朝日長者”とも呼ばれ、後千町・前千町の美田を幾千人もの使用人に耕作させ、贅沢三昧の生活をしてきた。ある時、祝いの席で、長者は鏡餅を的に弓矢を射る遊びを思いついて、自分で矢を放った。すると鏡餅的かみもちは白い鳥に変わり、南の彼方へ飛び去ってしまった。これを期に、この土地ではコメがまったくとれなくなって、長者一族は没落し、人々は天罰とうわさした。そして千町の美田は、不毛の荒野と変わり果ててしまった。》

この土地には、現在でも「長者原ちようじゃばる」や「千町無田せんちようむた」などこの伝説にまつわる地名が残っており、白い鳥が飛び去ったとされる場所には「白鳥神社しらとりじんじや」が祀まつられている。千町無田は、筑後川の源流で、標高約900mの飯田高原に位置する。

阿蘇くじゅう国立公園の高原を貫いて走る通称「やまなみハイウェイ」と呼ばれる観光道路がある。この沿線に“朝日台”という名所があり、ここが朝日長者の屋敷跡とされている。この高台から千町無田の盆地を見下ろすことができる。朝日台のドライブインの裏手にブルーベリーの小さな畑があり、その向こう側に山を削った土壤断面を見つめることができた。典型的な堆積火山灰土壌の断面である。A層には腐植が集積して黒ボク土壌の特徴を示している。千町無田は、これらの黒ボク土壌が低地に集まってできた湿地と考えられるので、黒ボク土水田地帯である。土壤分類では、「多腐植質黒ボクグライ土」に属し、その作土I、II層の理化学性は表に示したとおりである³⁾。

このような黒ボク土水田で稲作をすれば、まず気がかりなのがリン酸欠乏の問題である。豊後風土記の記述が正しいとすれば、奈良時代以前にこの千町無田で、どのように稲作が行われていたのだろうか。

この疑問を解くために、「野鳥飛來說」を引用して、土壤肥料学的に次のような考察を行ってみた。

すなわち、朝日長者の伝説を三段階に分けて考えると、①水田でよくコメが穫れた←渡り鳥の飛来が多く、この鳥が糞としてリン酸などの養分を供給した、②鏡餅的かみもちに矢を射かけると白鳥となって逃げた←食用として野鳥を乱獲した、③急にコメが穫れなくなった←野鳥の飛来が激減して水稲のリン酸欠乏が顕著になった。

このような現象は、千町無田のような火山灰土

水田ではとくに顕著に現れたと思われるが、日本列島の他の地方でも観られたのではないだろうか。この点については、3項で詳述することにする。

2. 千町無田の近代開拓史

千町無田は、江戸時代には何度か開拓の試みがあったことが記録に残っている。江戸時代には、千町無田は徳川幕府の直轄地（いわゆる天領）だった。日田代官所の管轄で、その記録によれば、開拓の試みはいずれも失敗している。

千町無田が本格的に開拓され始めたのは明治になってからである。明治22(1889)年の筑後川大洪水によって生活の術を失った多くの小作農民は、600名がハワイへの移民を決意した。しかし、移民の選に漏れた残り組も多く、彼らは筑後川を遡って千町無田の開拓に挑むことになる。この開拓を指揮したのが、旧久留米藩士の青木牛之助である⁴⁾。青木は、この千町無田開拓の許可を得るために大変な苦勞をする。県が福岡と大分にまたがっていたことも許可が下り難い原因であった。青木は上京して、時の明治政府の要人だった山岡鉄舟に面会するなどの苦勞を重ねた末、ようやく開拓申請の許可を得る。

写真1. 青木牛之助 (1846-1923)



先遣隊27名を率いて、青木が千町無田に入植したのは明治27(1894)年のことである。翌年には移住開拓団（家族を含む）が入村する。全員が故郷の家屋敷を処分して、背水の陣で臨んだ入村

であった。そして、この開拓事業は最初から苦難に直面する。リン酸肥料が無い時代の黒ボク土原野の開拓である。その厳しさは想像に余りある。

生活苦と失望から脱落者も出るが、後続の入村者もあり、明治37(1904)年には開拓者の数は43戸となる。近くの硫黄山から採掘された硫黄の運搬などで日銭を稼ぎ、何とか食いつなぐというギリギリの生活をしながら、開拓は少しずつ進められてゆく。「馬や牛でも少しはうまいものを食っている」と嘆かせた当時の生活は、まさに悲惨そのものであったようだ。

この開拓事業がどうにか軌道に乗ったのは、明治38(1905)年である。青木牛之助の侍魂による指導力と、移住農民の不屈な開拓者魂の成果と言えよう。

表. 千町無田の水田土壌（作土）の理化学性

層位	土性	腐植	CEC	リン酸吸収係数
I	SiCL	16.7	33.5	2,140
II	L	18.9	50.8	3,160

1) 単位は、腐植:%、CEC:me/100g、リン酸吸収係数:mg/100g
2) 参考図書3)より引用して改表

しかし、千町無田が本当の美田に変わったのは、戦後になってからである。黒ボク土とリン酸の関係が科学的に解明され、千町無田の水田にも十分なリン酸肥料が施されるようになって、水稻の収穫量は飛躍的に向上した。まぼろしの“朝日長者の美田”がようやく実現したのである。さらに、水稻苗の根に過リン酸石灰をまぶして移植する「根付リン酸」という施肥法が考案され、収量はもっと高まる。昭和30(1955)年には、714.4kg/10aの高収を上げた人が出て、「米作日本一九州ブロック増産躍進賞」まで受賞した⁵⁾。

千町無田の開拓が始まった当初、どうしても水稻がうまく作れないことを知った農民たちは“朝日長者の崇り”を疑った。このため開拓村の中に「朝日神社」を祀って、稲作の定着を祈願したのである。この神社には、現在は、朝日長者などとともに、青木牛之助が合祀されている⁶⁾。また境内には、青木牛之助の顕彰碑に並んで、千町無田開拓百年記念碑(1992年建立)が建てられている。

写真2. 白鳥神社 (大分県九重町)



3. 白鳥神社の由縁

千町無田の近くに白鳥神社が祀られていることは前述した。この神社について少し調べてみたが、必ずしも千町無田伝説のみと関係しているとは思えなくなった。というのは、全国に白鳥神社は120社もあるそうで、この神社についてはもっとオール・ジャパン的視野で考える必要があるようだ。とくに白鳥神社が多いのは、愛知県30、岐阜県13、宮城県9、香川県6、滋賀県5社などである。上記の千町無田伝説のある大分県にも4社がある。

この神社について文献⁷⁾を調べてみると、古代史研究家の芦野 泉氏が、ちゃんと土壤肥料的な考察をしていたことに驚いた。芦野氏によれば、種々の白鳥伝承は初期農耕における穀霊信仰と深くかかわりを持っているということだ。稲刈りの終わったところから翌年の春まで、日本列島には多数の渡り鳥が飛来して大量の糞を水田に残していたようだ。鳥の糞はNPKの三要素をはじめ多くの養分を含むため、この糞による水稲の増収効果は著しいものがあつたと思われる。渡り鳥の多く集まる水田と、あまり集まらない水田の間で、コメの収穫量にも差異が観られたことだろう。このようなことから、古代農民は、渡り鳥(ハクチョウなどの白い鳥が多かったか)を神の使いあ

るいは神そのものとして崇めるようになったと想像される。これが白鳥信仰の源流であろう。

しかし、後になって、農民たちは鳥を狩猟して食用とすることを覚え、渡り鳥の飛来が減少をはじめめる。このあたりの経過を、警告を込めて上記の朝日長者伝説は伝えているのではないだろうか。

このような古代の環境破壊はまた、時の政府(大和朝廷)をも悩ませたようだ。天武天皇の時代の675年に、「殺生禁断・肉食禁避の勅」が發布され、鳥獣の狩猟・食肉が禁止されている。実はこの勅令の趣旨は、日本史上では、幕末から明治維新のころまで千年以上も生き続けることになる。安政元(1854)年に幕府が、米国使節ペリーと締結した日米和親条約(下田条約)の中に、次の一項が書き込まれている。

《鳥獣遊猟は却て日本において禁ずる処なれば、^{アメリカ}亜墨利加人もまた此の制度に伏すへし》。

以上、大分県の一地方における「千町無田開拓史」を題材にして、日本の稲作史における土壤肥料の問題を考察してみた。家畜糞尿などの有機性廃棄物が溢れかえり、化学肥料が安価に入手できる現代では、考えも及ばない内容かもしれない。しかし、文化土壌学の対象として、日本の歴史の一断面という観点から、それらを考えておくことも必要かと筆者は思うのである。

参 考 図 書

- 1) 佐藤四信『豊後風土記の研究』(明治書院) 1956
- 2) 小野信一『土と人のきずな』(新風舎) 2005
- 3) 農林水産省九州農業試験場『写真でみる九州の土壌と農業』1980
- 4) 古賀 勝『大河を遡る』(西日本新聞社) 2000
- 5) 農林水産省九州農業試験場『あるいてみる九州の土壌と農業』1982
- 6) 小野喜美夫『朝日長者』(飯田文化財収蔵庫) 1991
- 7) 芦野 泉「東アジアの古代文化47号」(大和書房) 1986